



Title	上野リッチ : ジャポニスムの新たな展開
Author(s)	牧田, 久美
Citation	デザイン理論. 2023, 81, p. 38-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91056
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上野リッチ

ジャポニズムの新たな展開

牧田 久美 京都市立芸術大学芸術資源研究センター

はじめに

昨今上野リッチ（フェリス・リックス）の独自のデザインへの評価は高まり、本格的な展覧会や研究の緒が開かれてきた。リッチが 1916 年から 1932 年にかけてウィーンと京都をほぼ隔年に行き来してデザインを展開した稀有な立ち位置のデザイナーであったこと、また彼女の身上である「誰の真似でもない独自性」はつとに知られているが、これらを強調するあまり、ウィーンと日本相互で様々なものを旺盛に吸収して作品に展開したリッチの柔軟な対応は見過ごされがちである。

本発表ではこの時期のオーストリア応用美術博物館のリッチのアーカイブ約 400 点を詳細に調査し、極めて活動的で有能なデザイナーとしての彼女の自由な「ファンタジー」の進展を検証した。

次にその結果を当時のウィーン工房の経営路線と関連付け、リッチの日本での存在意義をウィーン工房由来のジャポニズムの視点から確認した。

ジャポニズムの展開を中心に

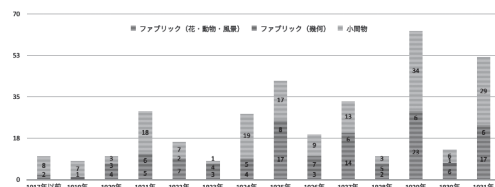
リッチは 1893 年、ウィーンの裕福なユダヤ人実業家の長女に生まれ、草花をこよなく愛した少女時代からウィーン工房のデザインに憧れ、1912 年 19 歳でウィーン工芸学校に入学。ホフマンの授業から生命感や想像力を重視した「ファンタジー」を学んだ。ウィーン工房創始者でもあるホフマンの 1898 年の論文は「我々は日本人から何を学ぶるか」というもので、同じく創始者のコロマン・モーザーと共にジャポニズムに深く傾倒し、同校学生の装飾の多様性は、所属する帝国立

オーストリア芸術産業博物館収蔵の多量の日本の図案集と型紙無くしては考えられないと言われている。

リッチは 1917 年 24 歳の卒業時にホフマンに強く要請されウィーン工房のメンバーとなる。当時は第一次世界大戦下で男性は戦場に与られ、工房では多くの女性が活躍、戦争で低迷する工芸の活性化を目的に前年工房内に新設された「芸術家工房」が彼女らの創作拠点となり、リッチもここで活躍した。

やがて 1925 年には近代装飾芸術の画期となったアール・デコ展がパリで開催され、リッチは銅賞を受賞、また同年ウィーンに留学中の日本人建築家上野伊三郎と結婚する。この結婚で重要なことは工房に籍を置いたまま仕事を継続したことである。リッチはウィーンと伊三郎の故郷京都を隔年に行き来しデザイン制作するという稀有な立場を得た。ジャポニズムへの憧れを持ったリッチが本家本元の日本に触れどのように変容、発展していくか。極めて重要なこの時期のアクティブな作品展開の具体的な経緯と意義を実証した。

グラフはリッチのアーカイブから、作品数の推移や、布地と小間物、具象柄と幾何柄の比率などをまとめたもので、作品の急増あるいは来日以後



リッチ年間作品数の経緯（MAK アーカイブより）

